

## CLASSIFIERS AND BOUNDING

モノを数えるとき、日本語は数量類別詞を使う。近年数量類別詞が注目されつつあり、多くの言語学者により多岐に渡って分析されているが、認知機能を探る研究は少ない。今回、数量類別詞の体系をもつ言語の一例としての日本語を対象に、数量類別詞が **bounding** 機能を果たすことを明らかにする。

まず次の四点を主張する。第一に、日本語のような数量類別詞言語の名詞の本質は不可算(**uncountable**)である。不可算なモノを数えようとすると、境界を与えることが前提となり、すなわち **bounding** される必要がある。従って、**bounding** 機能を持つ数量類別詞を使わなければならない。

第二に、英語の名詞は可算名詞 (**count noun**) と不可算名詞 (**mass noun**) に分けられ、可算名詞 (**count noun**) は今までの研究では、境界線をもつ、すなわち **bounded** なものと指摘されてきた。しかし、ここでは、可算名詞の境界は本来内在するものではなく、複数に伴う語形変化によって、与えられ、**bounding** され则认为る。

第三に、不可算名詞 (**mass noun**)、例えば **water, furniture, cattle** などを数える時に、それぞれ “**a glass of**”、“**a piece of**”、“**a herb of**” などを使って、均質なものを単位化あるいは定量化することによって、均質の不可算名詞に境界が与えられ、すなわち不可算 **bounding** されている。

第四に、日本語の名詞は、不可算名詞に似ていて、数詞が直接名詞の前に置くことができない、例えば、「\*2 の本」は容認されない。「2 冊の本」のように、数と数えるモノの名前の間に必ず「冊」という数量類別詞を付けることが要求される。従って、数量類別詞が境界のない名詞に境界を与えて、**bounding** 機能を果たしている。

以下では具体的に、数量類別詞の **bounding** 機能を検討する。日本語のような数量類別詞言語には、単数・複数の区別は義務的ではない、例えば、(1a)の場合、紙は何枚あるかは明確ではない、一枚かもしれないし、百枚かもしれない。この場合、数を定めることは困難で、数より「紙というもの」のイメージが強い。すなわち英語の質量名詞のように境界がなく全体として均質なものと扱われている。しかし、(1b)のように数量類別詞「枚」をつけると、境界のない均質のものという読みがなくなり、境界が与えられたユニットとして捉えられる。従って、数量類別詞は区切りできない裸名詞を数えられるようにその名詞を **bounding** している。

例(1) a. 机の上に紙が置いてある。

b. 机の上に 2枚の紙が置いてある。

次に、日本語の数量類別詞「本」は、木、鉛筆、箸、ロープ、紐、髪の毛などから注射器、ナイフ、刀などまで、幅広く使われている。例(3)をみてみよう。

- 例(2) a. 2本の紐で古本を束ねた。  
b. 2本の刀を持っている。

例(2)の紐と刀は全く異なる分類学的カテゴリーに跨っているが、形状ドメインにおいてはどちらも細長い特徴を持っている。数を表現する時、どちらも数量類別詞「本」を用いて細長いという認知ドメインを **bounding** し、結果として両者とも「本」で数えることになる。従って、一つの数量類別詞が複数の名詞指示物に使えることにも数量類別詞の **bounding** 機能がみられる。

また、同じものは場面、文脈によって使う数量類別詞が変わる。例えば、例(3)に挙げられた飛行機の場合、飛行能力に焦点を当てると(3a)のように「機」を用いるが、飛行機の機械性を注目すると、(3b)のように「台」の方が適切になる。また交通手段としての飛行機の運航の数は(3c)のように「便」で数える。

- 例(3) a. 飛行機 1 機  
b. 飛行機 1 台  
c. 飛行機 1 便。

Langacker(1988b)ではものカテゴリーは多様な側面を持っていることを複数の認知ドメインの絡み合いとして説明されている。前景化されたドメインによって使われる数量類別詞が異なる。しかし、ドメインは漠然として概念的なものなので、数量類別詞によって **bounding** され、境界が与えられてから前景化できるようになる。従って、一つのものに複数の数量類別詞が用いられることにも数量類別詞の **bounding** 機能が見られる。

ここまでは、日本語を例に数量類別詞の **bounding** という認知機能を確認した。裸名詞はあるタイプのものを意味し、本質は不可算 (**uncountable**) である。しかし、日常生活の中では、我々は常にものを数えることに直面する。その際、日本語のような類別詞言語は主に具体性の高い数量類別詞を使い、英語のような非類別詞言語は抽象性の高い接尾辞 **S** を使う。

### 主要な参考文献

- 深田智&仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』 東京：研究社
- 飯田朝子.1999.『日本語主要助数詞の意味と用法』 東京大学人文社会系研究科博士論文。
- John R. Taylor & 瀬戸賢一. 2008. 『認知文法のエッセンス』 東京：大修館.
- Langacker, R. W. 1988b. An overview of cognitive grammar. In *Topics in cognitive linguistics*, ed. B. Rudzka-Ostyn, 1-48 Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. 1990. *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. 2008. *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.